

暴君 第2章

takamiism

「先輩って、友達、いないんですか？」

帰り支度をしている時だった。

「いきなりだね」

「私、教室に行きましたよね」

「うん、あれね」

「あの時、何となく、思ったんです。先輩、一人なんだなって」

「同じクラスの人と会話を交わすことぐらい、あるよ」

「でも、友達はいない」

「あ、そういえば、その友達が言っていたんだけど」

「え？」

「僕の後輩、かわいいってさ」

「え」

「僕じゃなくて、友達のコメントね」

「それは、聞こえてました」

「ご感想は？」

「いえ、別に」

「いえ、別に？」

にらまれた。

「本当に、先輩の友達なんですか？」

「人のことばかり言うけど、後輩の方はどうなの？」

「私ですか」

「僕に後輩は、一人しかいない」

「私には、いますよ。それなりに」

「ほう」

「先輩とは違います」

「そりゃ、人」

にらまれたので、途中までしか言えなかった。

「ここにさん、ここにさんや」

久保寺君が、机の横に立つ。

体育の後、着替えを済ませて、一息ついたところだった。

「話題になってますよ」

「え、何の話？」

久保寺君が顔を近付けてくる。

「例の、ここにさんの後輩」

「そうなの？」

「そりゃ、もう」

「僕は、聞いたことないけど」

「男子トイレにおける、最新トピックですな」

「ああ、溜まり場の」

「あれは誰なんだ、ここにさんとどういう関係なんだって」

「へえ」

「俺がその場にいる時は、説明してるんだけど」
「直接、僕に聞けばいいんじゃない？」
久保寺君が、ため息をついた。
「こにさんは、俺としか話さないから」
「他の人を拒んでいるつもりは、ないけど」
「ま、とりあえず、ご報告申し上げた次第」
「わざわざ、どうも」

午前の最後の授業は、音楽だった。筆記用具やノートを持って、教室を移動する。
階段を上った。一年生のクラスが並んでいる。
ちょうど、階段の近くの教室に、女子が入っていくのが見えた。
小柄。肩までかかる髪。横顔。
大宮さんだ。
さらに階段を上ろうとして、足を止めた。
階段を降り、教室まで行き、入口から中をのぞく。
奥の方で、大宮さんが数名の女子と話をしている。
男子が一人、教室から出てきた。
「あ、あの」
「は？」
男子が、こちらの胸のあたりを見た。学校指定のバッジを確認している。
「あ、はい、何でしょうか」
「ちょっと、人を探しているんだけど」
「誰を、ですか」
「大宮さんを」
「ああ。いますよ」
しきりにうなずいて、教室に戻る。大宮さんに話しかけるのが、見えた。
大宮さんが、こちらを見る。男子に笑顔で何かを告げて、教室の外まで来た。
「先輩、何ですか」
眉間にしわを寄せている。
「え」
「急に、どうしたんです？」
「いや、音楽室に行く途中で、見かけたから」
「そうですか」
「あの、怒ってる？」
「いえ、別に」
「あ、そう。用事は、特にないんだけど」
「そうですか」
「です」
「では、失礼します」
「あ、うん」
教室に戻る大宮さんを見送って、音楽室に向かった。

鍵を開けて、部室に入る。
窓を開けて、放課後の空気を室内に入れた。
椅子に座った時、扉の開く音がした。

「先輩、何なんですか」

入口に立ったまま、大宮さんが言った。

「ま、とりあえず、座ったら」

「結構です。話をそらさないでください」

「いや、そんなつもりでは」

「じゃあ、どういうつもりなんです？」

「いや、まあ、教室の近くを通りかかったから、ちょっと、どんなものかな、と」

「何がです？」

「後輩に、本当に友達がいるかどうかって」

「この前の話ですか」

「そう」

「嘘だと思ったんですか？」

「いや、そういうわけでは」

「私、嘘ついたこと、ないので」

「それは嘘だよな」

大宮さんは、ため息をついた。

「あれから、大変だったんですけど」

「え？」

「先輩が帰った後、色々と質問されました。さっきの人、誰なのって」

「ああ。日頃見かけない人がいれば、目立つよね」

「上級生が教室に来ることなんて、滅多にないです」

「ま、ただの部活の先輩だけど」

大宮さんがじっとこちらを見る。

「あれ？」

「知りたいですか？」

「部活の先輩」

「どう説明したか、知りたいですよね？」

「いや、言いたくないなら、別に」

にらまれたので、目をそらした。

「えっと、一応、知っておこう、かな」

「秘密です」

「は？」

「だから、秘密です」

そう言って、大宮さんはにっこりと笑った。

「先輩、目じゃなくて、手を動かしてください」

顔を上げると、机の上の段ボール箱が見えた。

大宮さんは、その中から冊子を取り出している。

「何を読んでいるんです？」

読んでいたノートを持ち上げて、見せる。

「十年近く前の、読書報告」

「やる気、ありますか？」

「こうして、感想を一つずつ見ていくと、面白いよ」

「面白い？」

「うん。色々な本があって、色々な感想があって。同じ本に対する感想でも、その内容は全然違う」

「まあ、そうでしょうね」
「色々な人間がいる。そう思うと、愉快だよね」
「愉快なところに、水を差すようなんですけど」
「うん？」
「先輩を愉快にしてくれる、この段ボール箱たち、今まで放置してたんですか」
「ああ。僕が入部した時から、そこにあったけど、気にしてなかった」
「冷たいんですね」
「そんな冷たい先輩からの提案なんだけど」
「根に持ってます？」
「僕たちも、読書記録みたいなもの、やってみようか」
「私たちも、先輩たちに続けってことですか？」
「そこまでのものは、ないけど」
「いいですけど、先輩」
「ん？」
「その前に、段ボール箱の確認、まだ二箱、残ってます」
「それは、信頼すべき後輩に任せる所存」
大宮さんに敬礼した。にらまれた。

「あんた、部活、やってるの？」
家に帰ると、居間で母に尋ねられた。
「え、うん」
「帰ってくるの、早いじゃない」
「今日は、部活がないから」
「そうなの？」
「えっと、何かあるの？」
「前に言ってた後輩、大丈夫なの？」
「部活には来ているけど」
「ほら、あんたが一年生の時、他の人がみんな、辞めちゃったじゃない？」
「・・・ああ」
「だから」
「うん」
「うんって」
「大丈夫だと思う」
「あら、自信あり？」
「いや、希望」

「先輩、これ」
最後の段ボール箱の中を確認している時だった。
大宮さんから、ノートを受け取る。端のあたりが、少し変色していた。
「古そうだね」
「その、最初のページを見てください」
「日焼けした匂いがする」
最初のページに目を通す。
「えっと、『読書部の設立にあたり、尽力してくださった顧問の成上先生に感謝します。部員一同を代表して、読書部部长』」

「その成上先生って、成上先生ですよ？」
「同姓の別人でなければ、おそらく」
「先生、ずっと顧問をしているってことですか」
「これ、日付は、十四年前だけど」
大宮さんが段ボール箱の中をのぞく。
「もう、それで最後ですけど」
「じゃ、確認作業は、これで終了ということで」
「帰りに、先生に報告しますか？」
「そうだね。一緒に報告にいこう」
大宮さんが少し笑った。
「え、何？」
「いえ、何でもありません」
「その時に、先生に聞いてみよう」
「何をです？」
「この部の、短くも長い歴史について」

部室に鍵をかけ、並んで廊下を歩く。
「失礼します」
二人で職員室に入り、奥まで進んだ。棚に鍵を返す。
棚に一番近い席を見る。先生の姿はなかった。
「先生、いないみたいですわね」
「見ればわかるよ」
「先輩」
「ん？」
「おあずけですね」
「大丈夫。楽しみは後にとっておくタイプだから」
「初耳ですけど」

チャイムが鳴って、しばらくしてからだった。
「こにさん、ちょっとお聞きしたいことが」
数学のノートから顔を上げる。久保寺君が、前の椅子に座る。
「さっきの数学の問題なのですが」
「ちょうど、僕も聞きたいことがあるんだ」
「ほう、それはそれは」
「久保寺君って、特定のグループに入っていないよね」
「そうですな」
「で、僕にも話しかけてくれる」
「まあね」
「珍しいよね」
「え」
「すごいよね」
「お？」
「僕には、できないことだ」
「こにさん」
久保寺君が、首を振る。

「お気を確かに」
「本心だよ」
「いや、冗談じゃなくて。急に、どうしたわけ？」
「さあ」
「大丈夫？」
「男子トイレの最新トピックは、どうなってるの？」
「ん？」
「前に話してくれた、僕の後輩がどうのって」
「ああ。もう下火になってますな」
「噂なんて、七十五日も続かないよね」
「え？」
「いや、別に」

「先輩、何を読んでいるんです？」
読んでいた本を机に置いたまま、開いている窓を眺めていた。
机を挟んで、前の椅子に座る大宮さんを見る。
「いや、今は読んでいないよ」
「先輩が手に持っているものは、何なんですか」
「今さらなんだけど」
「何です？」
「どうして、この部に入ったの？」
「今さらですね」
「先に言っておいたよ」
「部活紹介の冊子、もらったんですけど」
「ああ、入学してから配布される」
「それぞれの部活の紹介とか、勧誘のためのメッセージとか、書いてあって」
「うん」
「この読書部だけ、ページが白紙でした」
「ああ。何か書いて、提出するように言われて。だから、何もないですって」
「先生、何か言わなかったんですか？」
「先生と相談して、決めたんだ。興味のある人は、そんなことをしなくても、入部してくるだろうって」
「へえ」
「ま、それで、一匹は釣れたわけで」
「魚ですか」
にらまれた。それでも、続けることにした。
「それで？」
「え？」
「入部した理由」
「先輩が何を読んでいるか、言ってくれたら、教えてあげます」
「じゃ、今日の部活が終わった後、職員室に鍵を返してくれるなら、教えよう」
部室の鍵を差し出す。受け取ろうとして、大宮さんの手が止まる。
「それ、フェアじゃないですよ」
「僕と大宮さんは、いつだって対等です」
「あ」
「え」

「先輩、私のこと、名前で呼びましたね」

「うん」

「初めてですね」

「そう？」

「ですよ」

大宮さんが笑って、鍵を受け取る。

「さ、先輩」

「交渉成立だね」

本の表紙を見せる。

「これはね」

その時、窓から風が吹き込んできた。もうすぐ夏がやって来ることを告げて、大宮さんの髪を少し揺らした。